

◆いざかまくらトラスト 鎌倉文化を学ぶ会 第1回◆

講演 // 「鎌倉幕府滅亡の舞台～元弘三年、東勝寺炎上～」

昨年11月14日(日) 午後、いざかまくらトラスト主催・推進協議会共催の「鎌倉文化を学ぶ会第1回」が開かれました。元弘三年(1333)、北条一門は菩提寺の東勝寺に追い詰められて滅亡しますが、その劇的な歴史のドラマを語る講演と東勝寺跡の見学が行われました。講師は同トラスト代表で鶴見大学文化財学科教授の伊藤正義さんです。

東勝寺跡は小町3丁目の葛西ヶ谷全域に及びます。滑川に架かる東勝寺橋を要として扇状に展開する谷で、橋を渡って上り詰めた谷の奥が「腹切やぐら」です。幕府が見渡せる景勝の地であったこと、東勝寺が北条氏の政庁も兼ねていたらしいことなど、発掘調査にたずさわった時の体験を交えての伊藤さんの案内は具体的でわかりやすく、また、通説とは異なる所見や歴史の秘話が織り込まれた講演は実におもしろく、参加者を魅了しました。

以下は講演の要旨です。

●北条氏滅亡の要因

鎌倉幕府滅亡の原因は一般には北条氏の権勢の衰退にあると考えられているが、そうではなく最後の半世紀が極盛期であった。北条得宗家とその一門に集中した権力と富に対する一般の御家人の零落という状況下に起こった、富めるものへの再配分要求が幕府滅亡の契機であった。

●足利・新田の鎌倉攻め

鎌倉の防衛は蒙古襲来への備えを念頭に置いて西側の防衛を重視していた。切通は軍勢の通り道である尾根道を遮断する役割を持っており、防御の拠点ともなるが、鎌倉の北から西にかけての切通のうち、仮粧坂と大仏坂は鎌倉の外側が緩やかで内側の方が急で、防衛力が弱いため、北条勢はこの2か所と山之内に防衛の主力を置き、西の極楽寺坂は内側・外側ともに急峻であるため、その要害を頼りに主力を配置しなかった。鎌倉の防衛計画を熟知していた足利・新田勢は極楽寺坂・稲村ヶ崎には別働隊をつぎ込んだ。この攻防戦で最大の激戦地は霊山・仏法寺付近であった。仏法寺跡の東斜面の中腹に、関東大震災で滑落したが、稲村路が通っていた。その古道を迂回して極楽寺坂

の内側に攻め込んだのではないかと考えられる。時に元弘三年五月十八日のことであった。新田義貞が剣を投じたという稲村ヶ崎干潟伝説は、この故事から生じたものであろう。

●東勝寺炎上

4日後の五月二十二日、東勝寺に追い詰められた得宗家の北条高時以下の一族、近臣など総勢282人が自刃、殉死者総勢872人余、自ら火をかけた東勝寺の伽藍はことごとく炎上した。

『梅松論』には寄せ手の軍が在家(民家)に火を放ち、四方の風が鎌倉に吹き込んで、残りなく焼き払われたと、鎌倉全体が灰燼に帰したように記されているが、鎌倉の代表的な寺社は焼かれなかった。それらが蒙古調伏の重要な宗教装置だったからである。

●新田義貞の立場

鎌倉攻めの総大将は、足利尊氏の長男の幼い千寿王(義詮)である。軍団が美しい少年を戴くのは、少年が神の加護を受けるからで、古代からの信仰でもあった。新田氏は足利氏と同じ河内源氏で血脈の上では足利氏に勝るとも劣らないが、鎌倉政権の中枢部からは排除され、源氏將軍の正嫡と認められていた足利氏の下風に立た

ざるをえなかった。義貞は立場上千寿王麾下の諸將の一人に過ぎず、したがって北条氏滅亡後の鎌倉の支配権は千寿王にあって、義貞には渡らなかった。義貞は一門をまとめて上洛するが、朝廷を頼る以外に義貞の生きる道はなかった。

●その後の北条氏と東勝寺

消失した東勝寺は、千寿王によって速やかに再建され、9年後の1342年には関東十刹の五位に列するほど栄えた。滅ぼした相手の供養は、権力の継承を意味していた。それに対抗して後醍醐天皇は宝戒寺の建立を命じている。

高時の生母である円成尼と、北条氏の遺族・寡婦は伊豆の高時邸跡に配流。円成尼の銘文が鑄込まれた東慶寺の梵鐘も伊豆に移された。敗者の鐘が鎌倉に響いてはならないからであった。



現地を案内する伊藤正義さん(中央)



平成 22 年度春季講座 '歴史遺産と生きる' 第 3 回 講演要旨

建長寺の歴史・伝統と生きる

講師：大西龍彦さん りょうげん

とき：平成 22 年 6 月 5 日(土) ところ：建長寺応真閣



建長寺三門

◎坐禅

鎌倉時代から伝わっている禅というのが、なぜ今まで続いているのか、なぜ広く武士に親しまれたのかということを考え、坐禅を体験して頂けるとありがたい。坐禅には、体、呼吸、心、この3つを整えることが必要である。手の組み方のひとつに「叉手」(胸に右手をあて、その上から左手を重ね合わせる)があるが、禅の修行は座っている時だけに限らず、常に坐禅と同じ体、呼吸、心で24時間365日を過ごさなければならない、という意味が叉手には込められている。

私たちの命の時間はどれだけ残っているのかは自身では分からないもの。その命の時間をどれだけ一生懸命また大事に使いきることができたのか、これを考えるのが臨済宗である。鎌倉の武士は明日生きていられるかどうか保証のない時代に生きており、臨済宗はそういう点からも、時代に丁度合っていたのかもしれない。そのため、武士の心を惹きつけ、多くの方が集まられたのではないだろうか。

◎建長寺の創建

1253年に創建され、開基は北条時頼、開山は中国からの渡来僧・蘭溪道隆である。三門をくぐり仏殿に向う途中の両脇に柏槇という木があり、これは創建当時のものと言われているが、残念ながら建物としては当時のものはない。建長寺建立以前の臨済宗は坐禅だけではなく、断食や念仏、滝行などの様々な修行を混合していた禅宗であった(混合禅)。しかし蘭溪道隆の入寺以降の禅宗は、純粹に坐禅だけによって悟りを開き、修行を行うという形が確立された(純粹禅)。建長寺は日本最古の禅寺ではないものの、日本最古の

純粹禅の寺ということになるのかもしれない。

建長寺の正式名称は「建長興国禅寺」である。延暦寺もそうだが、国の年号を頂いた寺院は国内に幾つかあるものの、数は多くない。国の許可なしで年号はつけられず、当時は国との結び付きが非常に強かったことが想像される。

鎌倉時代、建長寺創建以前の土地は地獄谷と呼ばれ、処刑場であった。仏教のもとの考え方というのは、元来、人間の心というものは悪ではなく良いもの。全てを救うという考えから、処刑されてしまった方々を御供養するためにお地藏様を祀り、今でも建長寺で一番大切にしている仏様である。通常、ご本尊様は1箇寺に1体であるが、建長寺の場合は、お地藏様とお釈迦様がご本尊として祀られている。

◎鎌倉幕府滅亡後以降

幕府との結び付きが強く、鎌倉幕府滅亡後に力は衰えたものの、宗教や心の支えとしてしっかりと根付いていたため、建長寺での教えや禅というものが衰退し消滅するところまではいかなかったようである。

廃仏毀釈については、建長寺そのものには影響はなかったといわれている。寺院の裏山に半僧坊というお堂があるが、これは明治時代に同じ臨済宗である静岡奥山の方広寺より勧請されたもので、当時はお寺の復興活動のシンボルという意味合いが大きかったようである。

関東大震災による被害は大きく、ほとんど倒壊してしまったが、方丈以外の建物は復元されている。平成15年の創建750年の際、鎌倉時代のままの質素な姿を残すことを考慮すると共に、現状にあった形も同時に取り入れながら建物や庭園などの手直しを行った。

750年以上も前から、禅宗、坐禅というものが実際に受け継がれており、これはまさしく伝統である。しかし必ずしも修行道場に行かなくとも、その人がそこで得ようと思えば、その場すべてが修行道場になる。「直心是道場」という「求める心、素直な心、率直な心があれば、その場すべてが道場である」という禅宗の言葉もある。短時間で禅というものを理解してもらうのは難しいが、坐禅体験を通し、その中で感じたものを大事にして欲しい。今生きていることの有難さを心から感じられるのも禅のよさであり、そういったものをこれからの時代だからこそ、残していかなければいけないと感じている。